

授業を通して、 どう英語学習者を育てていくか

発表者：

長沼 君主（東海大学）

工藤 洋路（玉川大学）

津久井 貴之（大妻中学高等学校）



第2部の様子



工藤 洋路 先生

工藤先生：ここでは、第1部での調査報告（詳細はP.1～13参照）を受けて、実践的な部分を検討していきます。途中で皆さんにチャットで参加いただくパートもありますので、ぜひご意見をお寄せください。第2部は、1.研究の背景、2.ワークショップ、3.津久井先生からの実践の報告、4.実践の考察、5.長沼先生からのまとめ、という流れになります。

本実践研究では、調査結果から見えた「英語を使う力を高める学習方法がわからない」生徒が多くいる実態、「高校までの授業で英語を使う力を高められた」と64.0%の生徒が答えている一方でどのように学習したらよいかかわからないという矛盾、また、言語活動の有無にかかわらず「英語

を使う力を高める学習方法がわからない」という比率が高い実態を受け、生徒はなぜ英語力を上げる方法が分からないと思うのか、先生がいないと生徒は学習できないのか、言語活動中心の授業を行うだけでは自律的な学習者は育たないのかについて考え、深めていきます。

新しい高等学校学習指導要領では「自律的な態度」について、どのような学習がさらに必要なのかを自ら考え、授業での言語活動を充実させるための努力を授業外でも続ける必要があると記されています。高等学校学習指導要領、英語コミュニケーション、「英語」の「聞くこと ア」の目標では、Ⅰは「多くの支援を活用すれば」、Ⅱは「一定の支援を活用すれば」、Ⅲは「支援をほとんど活用しなくても」と支援を徐々に外し、自律に向かわせる記述があります（図2-1）。「学習ストラテジーを身につけさせる」は、自律した学習者を育成するための教師の役割の1つです。教師は、学習において生徒

が戦略的かつ自主的に行動できるように、中心的な役割を果たすことが望ましいです。学習戦略については、自動的に選択するのではなく、特定のタスクに適したものを選べるようになることです。このような背景を踏まえ、学習者の学習への意識、どのように学習戦略を選択していくべきかを、これから紹介する実践を通して、一緒に考えていきたいと思います。

ここからは、「ワークショップ:スピーキングの評価およびフィードバック体験」に入ります。津久井先生に、事前に授業の中でスピーキング活動を行ってもらいました。これから、その時の生徒のスピーキングの発話音声流します。スピーキングにおいてどのような課題があるかを考えながら、発話を聞いてください。チャットで皆さんの考えを共有した後、長沼先生、津久井先生からコメントをいただきます。生徒が取り組んだスピーキング課題は、“Which do you think is a better way to

communicate, emails or letters?”です。

〈1回目のスピーキング課題についてAさん・Bさんが発話している音声を聞く〉

発話だけからは考えづらい部分もありましたが、生徒が解決すべき課題や、問題に感じた点、つまづいている点をチャットに送っていただき、ありがとうございます。Aさんに関しては、「内容がまとまる前に、アイデア自体もまだ思いついていない様子」、Bさんは、「意見と理由のつながり部分」への課題などが挙がりました。皆さんからいただいたコメントを踏まえ、長沼先生と津久井先生からコメントをいただきたいと思います。

長沼先生: 即興的な話す力が求められる中、準備できない状況で、話しながら考える、考えながら話す力を鍛えることが大切です。Do you have any questions? と聞かれてから考え始めるタイプは、そこで会話が止まってしまうので、瞬発力、

図2-1

「支援あり」から「支援なし」へ

(例) 「聞くこと ア」の目標

英語コミュニケーションⅠ	英語コミュニケーションⅡ	英語コミュニケーションⅢ
日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、話し手の意図を把握することができるようにする。	日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、話の展開や話し手の意図を把握することができるようにする。	日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、必要な情報を聞き取り、話の展開や話し手の意図を把握することができるようにする。

即興的な思考力を鍛えることが重要です。

津久井先生：即興は、ゆっくり考える時間がないまま質問がくるので、構成に重きを置かなくてもよく、まずどう思うのかを伝え、たどたどしくても言えることを探しながら、自分が思う理由などを言えたらよいと思いました。生徒は、即興的なやり取りや発表で求められる英語と、きちんと準備をしたスピーチやプレゼンテーションの英語の質や量の違いには気づかずにごちゃ混ぜに考えてしまうところもあるので、その点は教師が整理してあげる必要があるでしょう。

工藤先生：もう一度AさんとBさんの発話を聞いていただき、今度は、もっとうまく話せるようになるための助言、学習方略へのアドバイスをお考えください。

〈もう一度、1回目のスピーキング課題についてAさん・Bさんが発話している音声を聞く〉

工藤先生：チャットでいただいたアドバイスを紹介しますと、「理由を言う時に、exampleを使いましょう」や「即興なので、もう少しシンプルに考えてもいいのではないか」等がありました。長沼先生からもアドバイスをいただけますか。

長沼先生：内容面のアドバイスをする時には、どのような学習方略で改善していくかをセットで伝えるのが効果的です。例えば、フィラー（filler:会話のつなぎ言葉）を教え、フィラーを使うことで時間が稼げるというストラテジーを教えます。コミュニケーション方略でもありますが、学習改善の練習にもつながります。2人に共通するのは、時間があれば、もう少し言えることや言える力があつたのではないかということです。準備時間は設けずに即興性を保ちつつ、2分間話させた後、1分間に縮めるように再トライさせることもできると思いました。

図2-2

Bさん

1 回 目	I think letters is better way to communicate because uh ... writing letter is so meaningful. Uh ... if you send emails, you have to write a word with hand, so I can tell, I can tell, (Friend?) I can tell friends my mind more. (Oh, I see.) Thank you for listening. (You're welcome.)
2 回 目	I think letters are a better way to communicate because uh I can tell my mind to my friend more clearly, and it made something that I ... that you can hold, so you can read whenever you want to do. I think letters is more important for me. The day before yesterday is my birthday, so I got many Congratulations emails, I felt happy. However, yesterday, I got some letters. I felt more happy, so letters are more important for me. It brings me happiness. Thank you.

工藤先生：この生徒たちには、2週間後にもう一度、2回目のスピーキング課題“Which is more important for YOU, emails or letters?”に取り組んでもらいました。同じ生徒の2回目の課題でのスピーキングを聞き、変化した点を考えていただけたらと思います。

〈2回目のスピーキング課題についてAさん・Bさんが発話している音声を聞く〉

工藤先生：Bさんを例にすると、少し長く話せるようになり、詰まる回数も減り、スピーキング力が伸びた印象があります(図2-2)。ここからは津久井先生に、1回目と2回目のスピーキング課題の間に、どのようなことを授業で実践していたかを報告していただきます。



津久井先生：今回は、高校2年生「英語表現Ⅱ」の授業で、実践の流れは次の通りです(図2-3)。

2回目の課題は、1回目の課題実施から約2週間後に行いました。2回目では、1回目の発表トピックから少しだけ形態を変え、「目的・場面・状況」を意識して、また、自分ごととして話せるように工夫しました。

1回目と2回目の発表の間に行う中間評価では、「振り返り」の質の向上により、取り組みの変容をねらった介入を行いました。振り返りの際に「スムーズに話す」「次は頑張る」と書きつつも、そのまま次の活動や発表の機会を迎えてしまう生徒が多いので、生徒の振り返りを利用して、「改善点

図2-3

教師の働きかけと介入に関する工夫について

以下の4点について指導支援を行なった。

そのほか、1回目の言語活動の後にあまり指導を入れずに、生徒自身がこれまでの活動で感じた自己の課題や取組から次の目標や改善点を考えてもらうようにした。具体的な支援やフィードバック、学習方法のサジェスションは中間評価時に行うことで、生徒自身の実態をつかむ時間と生徒自身が学習方法について考える機会を大切にした。

1

1回目と2回目の発表のトピックと形態を少し変え、自分ごととして話せるようにした。(目的・場面・状況への意識も視野に入れた微調整)

2

1→2回目の発表の間に中間評価(「改善点(目標)の共有」と見直し)を行なった。

3

Google Classroomを用いた情報提供(過去の先輩の発表映像・授業の振り返り)

4

1の見直しの際に、振り返りの記述から同じ課題を抱えている生徒同士でグルーピングを行なった。→発表も同じグループで行なうようにした。

5

生徒への個別の声かけやノート指導(事後も含む)

(目標)の共有」と見直しを示したスライドを作成し、共有しました(図2-4)。

また、自分の改善点を具体的な学習方略や努力の目標につなげられた生徒の具体例をGoogle Classroomで共有し、参考にしてもらいました。そして、生徒の振り返り記述から同じ課題を抱えている生徒同士をグルーピングし、グループ内で改善点を共有し、最後の発表でも同じ3人がグループになるようにしました。生徒には、自分が立てた目標の確認、自己評価、友だちの発表を聞きコメントをする、困っていたら助ける、など行うことがたくさんあるので、抱えている課題意識が同じグループをつくり、互いの改善点、学習方略が参考になるようにしました。事後の振り返りとして、生徒は2回目の課題が終わった後にもう一度評価

ワークシートに記入し、私から次に向けた助言コメントを入れています。生徒への個別の声かけやノート指導も行いました。

生徒が抱える課題は多様であり、課題や課題把握の度合い、振り返り、学習方略も様々です。例えば、生徒Cさんは、TED Talksを見てライティング学習をしている先輩の学習法をまねしたいと思い、自主的に始めたライティング学習と今回のスピーキング学習をつなげました。最初は先輩のやり方をまねしてTEDを聞き、メモを取り、サマリーを書くなどしていましたが、最近では、TEDだけでなく授業で読んだ英文を用いて自分なりに図式化したり絵をつけたりしてメモを工夫し、さらに感想や考えを書いてきており、自律的な学びの芽が見られます。

最後に、今回の実践を通して「主体的に学習に

図2-4

2

1 → 2回目の発表の間に「改善点(目標)の共有」と見直しを行なった。
(*下のスライドは授業で使用し、Classroomにアップロードしたもの)

目標を見直す4つの“-ables”

- ・とにかくスムーズに積極的に考えを話す!
- ・もはやネイティブ! っくらいに話しまくる!
- ・毎日寝る前に独り言を2時間つぶやく!

measurable できたかできなかったか測れる?(measureできる?)

achievable 24日に向けてやればできるようになるかな?

valuable 私の喜ぶ顔が見たい(笑)? いえいえ、その目標は自分自身のため。自分がやる価値ありと思っているかな?

sustainable 自分が決めた頻度で繰り返せそう? 「持続可能な」のが大切なのは、環境対策だけではない!

取り組む態度」や自律性を育てるためには、

- ①教師の英語指導観・学習観の振り返り
- ②生徒に起きている事実(授業・家庭学習)をみる術すべをもつこと
- ③教師が苦手な「待つ」「試行錯誤を認める」「見通す」姿勢や能力

が必要と感じました。教師がやり方自体の習得のプロセスや選択肢を示し、支援し、生徒自身が学ぶ機会を得ることで、自律性が高まると考えます。また、生徒の様子を見える化、記録しておくことは、生徒がどのような思考をたどっているのかを教師が知る上で大切です。生徒自身がそのプロセスを試行錯誤しながら、学んでいくためには、待つことも大切です。授業中、授業前後のフィードバックや支援の質は、生徒一人ひとりをどれだけ見られ

るか、見てきたかにかかっていると信じています。

工藤先生：次に、私からは、津久井先生の実践の考察をします。課題に参加した生徒全員の振り返りの記述を見ながら、生徒が立てた学習目標の分析を行いました。Oxford (1990)のカテゴリーを参考にし、私なりの視点を交えた分析になります。

「気持ち・意気込み」として、「頑張る」や「怠らない」と書いた生徒は多いですが、そのような気持ちをまずもつことが大事だと思います。また、心理面が出ている振り返りは、先生の記録として残しておきたいです。「学習計画」に数字で日にちや回数などを記述することも、具体的な目標となり、分かりやすいと思います。また、自分の発話音声も録音して、もう一度別の自分として振り返ることは、スピーキングでは効果的です。「学習内容(言語

図2-5

自律した英語使用者の育成に向けて

本科目（「英語コミュニケーションⅢ」）では、英語使用者としての自律性を更に高める必要から、「英語コミュニケーションⅡ」における「一定の支援」を活用する段階から、ほとんど支援がなくても課題に取り組むことができる段階へと移行する。これは、生徒自身が、コミュニケーションの目的を達成するためにはどのように対応すべきかを判断し、支援がほとんどなくても自力で目的を達成できるようになる、あるいは必要な支援を他者に求めたり協働したりしながら、目的を達成することができるようになることを意味している。

『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説
外国語編 英語編』

目的・場面・
状況への意識

自力を高める

他者やツールに
効果的に頼る

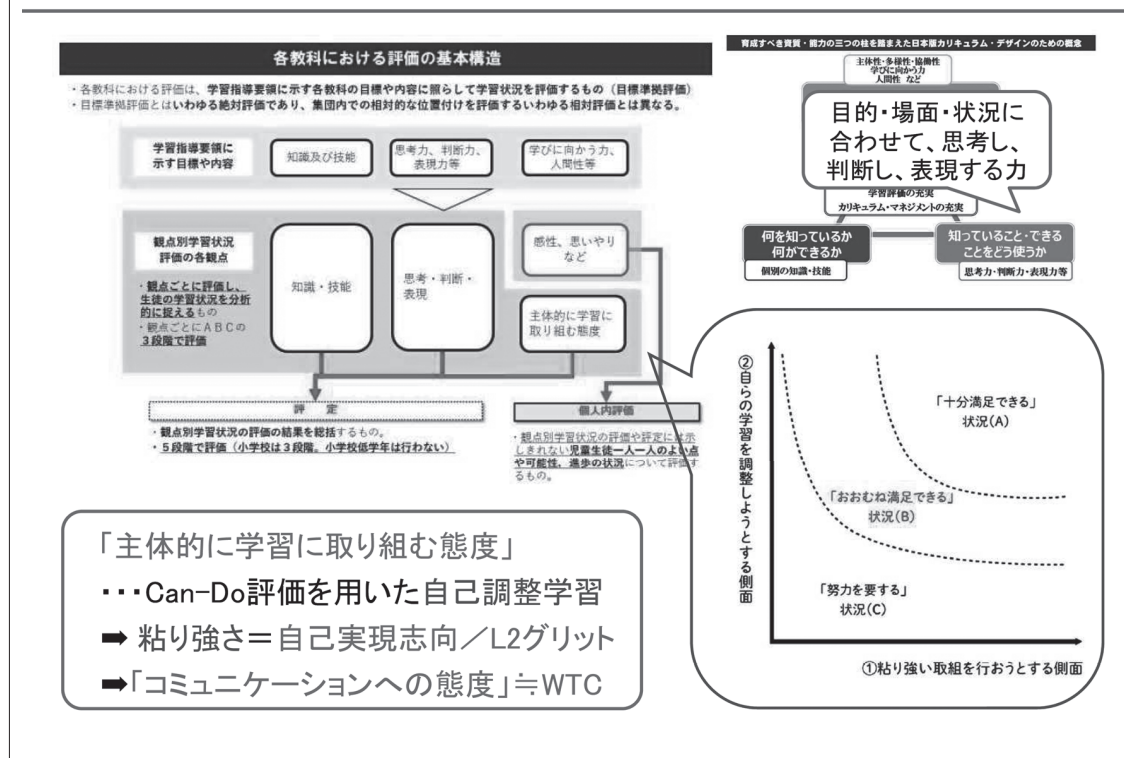
材料)」に関する記述もたくさんあり、単語や文法を学ぶ大事さに加え、形容詞を覚えることや冠詞の使い方などへの意識も見られました。「言語材料以外の学習内容」は、音声的なもの、プロセス的なもの、ライティングの構成等への記述がありました。生徒が考える学習方略の多くは、取り組んだ課題に特化したものになりがちです。その課題でなければ使えないものと学習の意義が低いものになります。課題に特化していない汎用性のあるものは、これから行う課題でも使用可能になることが多いので、その大切さを教師から伝えていくことが大事です。問題が起きたときへの「対策」に関する記述もありました。実際に起きなければ使わないかもしれませんが、感覚としてしておくことは大事ですし、問題に遭遇した状況を具体的に

思い描けることは、自律性が高くないとできないことです。友だちを前にした時のプランニングや、誰を相手に練習するか、他人をどのように活用するかなどの、「相手意識や他者とのかかわり」も大事なポイントです。

最後にご紹介するのは、高等学校学習指導要領のコミュニケーションⅢからの記述です(P.19 図2-5)。自律した英語使用者の育成に向けて、支援がなくても課題に取り組むことができるように、自力を高めつつ、他人をうまく自分の学習の中に利用し、頼ることも大事です。また、コミュニケーションをする目的、場面、状況を意識させることで、自力で判断をし、目的を達成できる自律へとつながります。これらをバランスよく育てていきたいものです。では長沼先生、最後のまとめをお願いします。

図2-6

資質・能力の三つの柱に基づく観点別評価



出典：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>



長沼 君主 先生

長沼先生：本実践研究では、1回目のスピーキング課題のプロンプトをより個人化でき、目的意識をもったものにできないかを考え、2回目では、Eメールか手紙のどちらが「自分にとって」重要であるかを考える設定に変更しました。Bさんは、自分の誕生日にもらったEメールと手紙とでは、印象が違ったことを話してくれました。このような会話の広がりが見られたのは、タスクの目的意識が自分ごとになったからです。

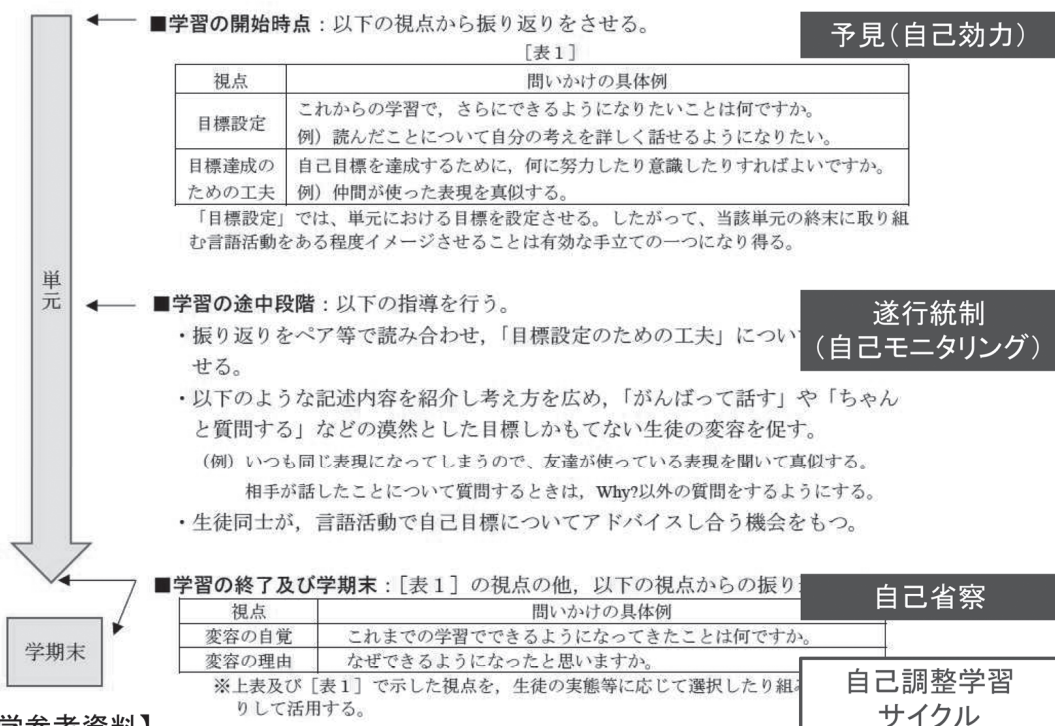
このスライドは、資質・能力の3つの柱に基づく

観点別評価についてです(図2-6)。「主体的に学習に取り組む態度」は、「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」の2軸で成り立ち、Can-Do評価を用いて、どのようになりたいかを意識して自己調整学習を行うことと捉えられます。「粘り強さ」は自己実現志向、やり抜く力(L2グリット)と関連しています。困難にめげず、長期的な目標へ向かい続ける力が、これからは重要です。そして、コミュニケーションへの態度、Willingness to Communicate(WTC)が、学びに向かう力を後押しします。

高等学校での「主体的に学習に取り組む態度」の進め方として、2パターンが提示された参考資料を紹介します。URL:[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r030820_hig_gaikokugo.pdf]

図2-7

「自己調整」を図ることができるようにするための指導



出典：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(国立教育政策研究所) <https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryoku.html>

内容を簡単にご紹介すると、1つは、「思考・判断・表現」の評価と合わせたパフォーマンス・テストでの評価です。主体的に言語活動に取り組む態度は、コミュニケーションへの態度と表裏一体の関係です。もう1つは、学びに向かう力、生徒が自己の学習を調整しようとする状況(自己調整)の観察によって評価する方法です。振り返りシートを使って評価をします。

次の資料は、中学校の「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」に記載されている「自己調整」を図ることができるようにするための指導プロセスを図示したものです。自己調整学習の理論にのっとると、予見、遂行統制、自己省察の3ステップを踏み、これらが授業の中でサイクル化していると考えられます(P.21 図2-7)。

学習開始時点では、見通しをもつこと(予見)が大事になります。これからの学習でさらにできるようになりたいことは何かを考え、目標設定をし、その目標達成のために何を努力し、意識すればよいかを考えます。予見には、先を見越した自己効力感により、取り組みそうな感覚をもたせることが含まれています。学習の途中段階では、「目標設定のための工夫」を行い、自己モニタリングを通して、自己のパフォーマンスの「遂行統制」をします。自分を調整しながら、学習をコントロールしていく感覚をもてるかです。学習の終了及び学期末には振り返りで「自己省察」を行い、リフレクションにより、変容を自覚します。

津久井先生の実践の中で「目標を見直す4つの“-ables”」として、measurable、achievable、valuable、sustainableが使われていましたが、振り返りの視点が与えられていて、よいと思いました。その他、観点別評価ルーブリックやタスク達成条件の提示も振り返りのポイントになります。生徒にアドバイスしたいことはたくさんあります。しかし、そのすべてを行うことは難しいため、個々の生徒

にとって一番改善が見込める、発達上最善と考えられる課題、改善が必要とされる課題は、どれなのかを見抜く力が、教師には求められています。

また、伝えたいと思うのと同時に、伝えたいのに伝えられない経験をするのも大切です。まずやってみて、指導・学習をして、やってみるというサンドイッチ型が重要です。『自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業—使いながら身に付ける英語教育の実現—』(日本標準)では、「使いながら身に付ける」「間違えながら身に付ける」といった使用が先という感覚、指導観が重要であるとあり、言語的挫折をうまく経験させることで働く、補償方略への意識を高めたいです。

最後に、「主体的・対話的で深い学びと学習方略」に関する教師への支援として、ストラテジー研究者のO'Malley & Chamot,1990のGeneric Strategy Classificationをご紹介します。メタ認知方略、認知方略、社会・感情方略などで、それぞれ細目化された方略がありますが、重要なのは、全部を網羅的に行うのではなく、どれが最も効果的なのかを感じ取り、選択できることです。選択肢やインプットがたくさんあり過ぎると、すべてを使いこなすことは難しいので、生徒が自分にとって今一番必要な方略を探せるようになることが重要です。学習方略の選択肢を広げ、状況に合わせて使用できる支援が必要となりますし、方略をどのように共有するか、先生からのアドバイスだけでなく、友だちや先輩のアドバイスだからこそ効く生徒もいます。これを動機づけでは「価値の内在化」といいますが、内在化されていかないとその方略のよさが届かず、使ってもらえないので、共感する呼びかけ、やり方を考えていく必要があります。

事務局：ありがとうございました。

最後に、本日のまとめを和泉先生からお願いいたします。

和泉先生：ひと昔前に応用言語学者のKrashenが言って言ったことですが、後で喜びを感じるやり方はDelayed gratification approachであり、喜びがある前に勉強ばかりさせられて、それに到達する前に疲れてしまう生徒が多いという大きな問題があることを指摘しています。ここでいうgratification(「喜び」)とは、コミュニケーションのことを指します。それに代わるアプローチがImmediate gratification approachです。21世紀の生徒たちにとって、Immediate gratification approach、つまりその場で喜びや、目的、意味を感じて学びを自分で深めていくアプローチは、非常に重要だと思います。生徒はそれぞれ違うので、現場の先生は気になければならないこと、考えなければいけないことがたくさんあります。ひとまとめに同じストラテジー・トレーニングや指導を行えばよいわけではありません。教師の役割は、teacher, checker, manager, evaluatorだけでなく、facilitator, moderator, initiator, discussant, debater, supporter, organizerなど現代では役割が増えており、生徒だけでなく、教師の自律性も考えていく必要が出てきています。教師が英語を使いつつ、学びを深め、学び続ける意欲とやる気を高めていくことは重要なことです。それは生徒と重なることでもあります。これからは教師の役割も変わってきますし、生徒に自由度を与えることで、不確定的要素、何が起こるか分からない怖さと同時に、面白さや、先生自身が生徒から学べる機会も増えてきます。そういったダイナミックな授業に面白さを感じ、生徒とともに成長していき、生き生きとしていく先生をもっと見られるようになっていくことを望んでいます。言語活動の丸投げではなく、ストラテジー・トレーニングなどを取捨選択しながら、先生も試しながら、言

語活動のあり方を考えていけばよいでしょう。授業を超えた学習と生涯にわたる英語生活のために教師は何ができるのかを、これからも一緒に考え続けていければと願っています。最後に、賢者の言葉で締めたいと思います“Give a man a fish and you feed him for a day. And teach a man how to fish and feed him for a lifetime.”